
『ものの怪の弟子』

紙屋 雪蟬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ものの怪の弟子』

【Nコード】

N3601N

【作者名】

紙屋 雪蟬

【あらすじ】

美しき「ものの怪」とその弟子になった少年を巡る物語。

ものの怪見習いの煤ノ介は、人間であることを隠し、化け物達の世界【まほうは幻場の里】で暮らしている。

里に住まう風変わりな住人（妖怪）や、霧靄一つ隔てた故郷、現世【うつしようちしよ】から迷い込む数々の厄介事に、後先構わず飛び込む師匠を追って、西へ東へ地獄へ極楽へ、巻き込まれ走り回る毎日。

暴き出されるは化け物の心、人の心。明暗際どい双方を見詰めながら、煤ノ介は見事師匠を超える立派なものの怪になれるのか。（仮）
ほんわか、たまにシリアス。和風異世界ファンタジーの予定です。

多少、流血など残酷な表現も含まれます。

序ノ巻（前書き）

はじめまして。かみやきよせみ紙屋雪蝉と申します。閲覧ありがとうございます。

初投稿です。

貧乏パソ無し。携帯でばち作成しているもので、携帯の閲覧画面での読みやすさに無駄な拘りをさらけ出し、改行多めです。

もしかしたらパソ閲覧だとちょっと読み難いかも。どうかご容赦くださいませ。

なにぶん粗忽者なので、中々お見苦しいところもあるかもしれませんが、新参者の御愛嬌と広い御心で楽しんで頂ければ嬉しいです。

それではまずは序ノ巻。どうぞお味見くださいませ。

序ノ巻

「童^{わらし}や、あっちへお行き。此処は危ないから」

その声は頭上から聞こえてきた。

唄い節にも似た軽やかな調子のその声は、男にしては柔らかく澄んでいて、女のものにしては低音が良く響く。

どちらにせよ、聞いたことがないくらい優しげで甘ったるい声音だった。

あの日のことは、何もかも鮮明と焼き付いて、未だ俺の脳裏から離れない。

俺は、五つだったか六つだったか。

兎に角、まだやっと頭で物を考えることを覚えただけの鼻垂れの餓鬼で、その時は声の主を見上げる気力すら残されていなかった。

だが、たとえ顔を上げたとしても辺りは炎の海。舞い上がる塵や黒煙で、一寸先も見渡せやしなかっただろう。

大体、こんな業火の最中から、呑気に響く涼しげな声音など、まず真つ当な生き物のものであるはずがない。

俺は熱を孕む床板に頬を押し付け、炎に揺らめく煙の影を見つめていた。

「ねえ、お前様、死んじまいますよう」

そんなことは言われるまでもなく解っている。

そう言うために口を開いてみても、灼熱の臭気が言葉を阻んで息を吐くことも儘ならない。

「ちょいっと、のんびり御寝んねしてる場合じゃあないでしょうに。戸口まで火が廻らねえうちに、疾つととお外へお逃げなさいな」

咳き込む俺に、多少なりとも苛立ちをその甘い声音に含ませて、頭上の声は言った。

俺は相手の顔も見ないまま、咳の合間を突いて呟いた。

「逃げたって行くところなんかないやい」

父も母も先に死んでしまった。亡骸は既に燃え崩れた柱の下だ。他に頼る親類も無い。

この炎を逃れたところで、最早己に生きる術など無かった。無駄に長らえて、飢餓や病に苦しんで死ぬくらいなら、この場で家族と共に潔く灰になる方がましである。

と、そこまで小難しい思考は出来ていなかっただろうが、その時の俺は、幼いながらにぼんやりとそんな覚悟を決めていた。

「んなこと言われたって。^{それがし}某にだって人間様の行くつ^{とこ}処なんざ見当もつかないよ」

声が近付いた。俺に覆い被さるように声の主がその場に屈んだのだ。そう知れた時には、辺りの息苦しい灰塵と煙が、何か風のような澄んだものに払われて、急に呼吸が楽になった。

煮詰まった花蜜のような、酷く甘ったるい匂いがした。

いよいよこの世の物の仕業ではないかと、俺は自棄に冷静な頭で、そんな滑稽な怪異を分析していた。

「参ったな。此れじゃ寢覚めが悪いったらない。人間ってえのは、もつと貪欲に生きたがるケダモノだと、某なんかは思ってたんですけど」

そう愚痴を溢すような口調と共に吹き掛けられた溜め息は、灼熱に汗ばんだ肌に冷たく貼り付いた。

やはり甘い香りが辺りを漂い、鼻先を擦って、それはこの声の主の息の匂いなのだと思いが付いた。

「こっからお庭に放ほうつてやつてもいいんですけど。某とお前様に『縁えにし』が出来ちゃ、後々（のちのち）なんやかんやら面倒臭いっさいがっさいえんどすよう。お前様が自力で逃げ仰せてくれりゃ、一切合切、丸く収まるんだけどねえ」

轟轟と唸りを上げる炎に囲まれていながらおかしい話だが、声の主が頭をぼりぼりと掻く音が鮮明に聞こえた気がした。

「人間てえのは本当、訳が判らなくっていけない」

俺は頑なにその場に突っ伏したまま、拳で煤の塊を握り締めていた。障子か襖か布団か、もしかしたら父か母の着物の一部かもしれない手のひらの中で粉のように崩れていくのが分かった。

「外に逃げたって、もう生きてなどいられない」

苦しさや和らいだ喉で俺が吐き捨てるように言えば、声は晴れやかに笑いだした。

煙の苦い臭いに混じる甘ったるい芳香が、炎の熱さえ飲み込んでいくようだった。

「何言ってるんですか。狐の火じゃあるまいし、お外まで火事は追っ掛けちゃあ来ないでしょうよ」

その能天気な物言いに、俺は漸く頭を上げて、声の源を睨み付けた。

「火が無くなったって、もう俺に生きる方法なんかないじゃないかっ」

食って掛かるように叫んでから、俺は驚愕に息を飲んだ。炎を背に俺を覗き込む姿の、その恐ろしい程の美しさに。

それは予期に違わず、やはり人外の化け物ではあった。ふわりと空に浮いた白い素足がまず視界に焼き付く。

装いも尋常ではない。化け物であれば白い死人装束を着るのは当然なのかもしれないが、その細い腰にわざとらしい程立派な太刀を帯びていた。

金銀宝玉、何やら無暗矢鱈に飾り立てた風の鞘が、凝る煙をものともせず豪奢に光り輝く。

その上、何故か青の蝶と真っ赤な薔薇^{いば}が大胆な柄の、派手な色使いの長襦袢を肩掛けて小粋に羽織っていた。

滑稽な程に派手な装いである。そしてそれを不自然なまでに完璧に

着こなしていた。

「もー。近道なんかしなけりゃ良かった」

すらりとした長軀は俺の頭上の宙に浮かび、それは背を丸めしゃがみ込むような格好のまま、気怠るげに頬杖を付く。

そうやって俺を見下ろす顔は、炎が舞い上がる家中に居るとは思えない優美な表情であった。

白磁の肌の上で、青白い紋様が揺らめき、陽炎の如く浮んでは消える。薄墨の眉は多少難しげに歪められて、妖艶な紫の唇は物言いたげな微笑に彩られていた。

長い銀の睫毛に囲まれた瞳はもとは深い青のようだが、炎を映し怪しげな紫紺色を宿す。

澄んだ白銀色の豊かな長髪からは、鹿角が鋭利になったような形の白角と、艶やかな白毛皮の、兎のような長い耳が伸びていた。

姿を目の当たりにして尚、雌雄の判別はつかない。

元よりそのような境界線など、疾うに超越してしまった存在かのようにも思われた。

この世の物とは思えぬ美しさだ。

今思えば、どこからどう見てもこの世の物でないと明らかなものを例える言葉ではないが、その時の俺は貧相な語彙を駆使してそう思ったのだ。

「お前、妖怪、なのか」

思わず口を突いた無意味な問い掛けに、それは薄い唇を歪めてけらけらと笑った。

「この状況でこの姿を見て、それを聞きますか。本ツ当に人間てのはよく解らない」

そう茶化すように言いながら、呑気に懷から煙管きせるを取り出して紫煙を燻くふらせる。

火事の黒煙とは明らかに異質な、妖しげな軽々しい煙が、穴の空いた天井へ昇っていく。

すらりと細身の長煙管は、持ち主の髪の色に合わさって、火皿と吸い口は白金で設えてあった。一尺は裕に超える羅宇らうに銀製の長細い蛇が巻き付いてる意匠だ。

「えっ？」

否、妖怪が吸い口から唇を離した瞬間、その蛇がにやりと鎌首をもたげて、俺はぎよっと目を見開いた。
生きた銀の蛇が巻き付いていたのだ。

「ひっ、」

俺が発した圧し殺した悲鳴に、蛇はびくりと蠢いて、逃げるようにするすると妖怪の手首へ移動した。

妖怪は大袈裟な身ぶりで肩を竦め、生白い手に絡み付く蛇に愛しそうに頬擦りした。

「馨子かおるこさんは別に他人様ひとさまに悪さんなんかしないのに、ねえ。ほらあ、傷付ちゃったじゃないですか」

そう言いながら、顔先に蛇を突き付けられる。馨子さんの世話しなく出し入れされる青黒い舌が、俺の唇に迫った。

「うっわあっ」

思わず飛び起きて、俺はその接吻を退ける。

「なんだ、丸焦げでおっ死ぬのなんか全然怖くないみたいな様をして、お前様、こんな小っちゃな蛇さんが怖ええんですか。うふふふ」可笑しそうに笑い、妖怪はふわりと焼け焦げた床に降り立った。真っ白い素足は火に巻かれるどころか、床に積もる煤にすら汚されることはなかった。

「仲間等なんかはね、人間なんて訳が判らんものは、さつさと喰っちゃまうしかないって言うんだけども」

炎はこの妖怪を畏れるかのように、その周囲は避けてはいるものの、炎勢は衰えることなく燃え広がっていく。立ち上がって戸口へと走ったとしても、庭に辿り着く前に火達磨になっていだろう。

俺は身体中煤まみれで、手足の至るところに出来た火傷の痛みに顔を歪ませる。それでも視線を上げ、眼前の美しきものの怪を無言のまま睨み付けた。

揺らめく炎を取り込んだ群青の瞳は、俺の眼差しと交わって、趣深

げに煌めいた。

「某はね、そりゃあんまりにもつまらねえって思っんですよ」

そう言つて、俺の頭を煙管の雁首がんくびでぴしゃりと叩く。

「痛っ」

俺が思わず額を押さえると、化け物はそりゃあ痛えでしょうよと呟き、俺の目線まで膝を折った。

「お前様みたいな小っさい命が、焼かれて叩かれて、痛くねえわけがないんだよ」

妖艶なまでに華やかな顔が間近に迫つて、なんの疚しさも知らぬ子供ながら、どきまきと顔に熱が集まつてきた。

「親もおつ死ぬの、手前も死に際だつて時に、怖くねえ筈がありますか。まだ某の爪の先程も世を知らぬうちに、もう生きたくねえだなんて、本気で思える訳がねえでしょう」

頷くことが出来なかった。

確かに本当は痛いのも熱いのももう嫌だったけれど。

父や母のように黒焦げになって死んで逝くのは、確かに途方もなく怖いことだったのだけれど。

「死にたく、ない……だけど、もう、辛いことばかりするために生きるのは、嫌だ」

貧しい暮らしの中に灯っていた、蝋燭の火のような微かな希望が、これで全て潰えてしまったことも、紛れのない事実だった。

妖怪は一息瞳を細めて俺を眺め、やがて煙混じりの甘い溜め息を吐いた。

「だからって、知らぬ存ぜぬの顔しちや、今更帰れねえじゃないですか」

独り言うように呟きながら、ふう、と長い煙を吐き出した。

「まったく、どうしようもない餓鬼に行き当たっちゃったもんだなあ。まあ、某はこの通り、厭きず世に永らえるお化けの身分。生きたくなる方法ってのは厄介だが、死なねえ方法つくらいなら、ぼちぼち教えてもあげられましょう」

煙は空に薄まることなく生き物の様に崩れ掛けた屋根の辺りを漂っていく。

「とはいえ、某みたいな【^{まほろば}幻場のものの怪】は、人間様と勝手な【^{えにし}縁】は結んじやなんない決まりごと。さてさて、童や、^{わらし}お前様」

そこで妖怪は言葉を区切り、空に舞い上がった紫煙を見上げた。煙は生きた蛇のように蠢いて、徐々に一重の輪を形作る。

輪がすっかり円になるのを見届けると、ものの怪は腰に下がる豪華な太刀の柄に手を掛けた。

「この輪っ架の向こつ側は化け物共の世界。人の世から見りや極楽・地獄とおんなじ場所にある処。知っちゃったたら人間様のまんまじゃ帰っちゃ来られません」

言ってすらりと引き抜いた太刀には鉄の刃はなく、陽炎のような危うげな何かが、頭上に広がった煙の輪を指し示した。

「おい、とくちもり渡口守の婆様よ。狸眠りも大概にしねえと、細切れにして三途の川へ流しちまいますよ」

化け物は唄うような調子を付けて、煙が縁取る輪っ架の中に剣呑な脅し文句を放り投げた。

すると、慌てたようにはっぱつと紫の煙に赤々と燐光が灯る。

次の瞬間、輪の中には焼け焦げた梁も、穴の空いた天井も無く、ただ薄紫の怪しい霧が濃淡を瞬かしていた。

「さ、童や。このまま黒炭か、それとも某みたいなものの怪か。どうせもう人間辞めるつきやねんなら、どっちか好きな方を選びやあ、如何です？」

呆然と天を見上げる俺に、剣を持たないほうの手を煙管ごと差し出して、妖怪が言った。

「ものの怪に、俺が？」

「そ」

恐らく相当な阿呆面で、突然突き付けられた選択肢を聞き返す俺に、美しいものの怪は短い相槌と共に頷いた。

「そりゃね、一朝一夕でどろんと化けられるってなもんじゃねえけども。あっちの世で某とでも暮していけば、その内それらしくもな

れるでしょうよ」

俺はまじまじと、妖しげな藍の瞳を覗き込んだ。

どんな場所で暮らそうとも、こんな美しい化け物に自分が成るのは到底無理な話だとは思った。が、焼死の他に突然転がり込んだその選択肢は、幼い俺を魅了するには充分すぎる希望に溢れていた。

「俺、」

しかし、一緒に行く、と言った俺の声は、突如響いた轟音に消されてしまった。傍らで火達磨になっていた柱が崩れ折れる。

「あ」

だが、火柱に抱かれる衝撃に瞼を閉じ身構えた身体には、なんの痛みも起こらない。

恐る恐る瞼を上げた俺の視界には、倒れ掛かる赤黒い炎の塊を、太刀を持つ腕で受け止め支える妖怪の姿があった。

流石に火に焼かれれば燃えるものらしく、腕を覆っていた白い袖は焼け落ちて、露になった細い腕に直接、焼けた木が寄りかかっている。

肌は焼け、顔にあるような青い紋様の光が熱に反応するかのように鼓動していた。

「熱っつい。お前様、よつくもこんな死に方で我慢しようと思いましたがねえ。某だったら絶え対御免です」

言う間に、何故か柱を燃やす炎は急速に青々とその勢いと熱を増していく。息を飲む間もなく、妖怪の腕を残して細かな灰にまで燃え尽きてしまった。

受け止めていた物を焼失した白い腕には、爛れて赤白く肉が見える生々しい火傷が露になる。

二の腕辺りにいた髻子さんが、そろそろと降りてきて、その冷たそうな胸を傷口に包帯のように巻き付けた。

妖怪は俄に痛そうな面持ちで顔を歪めたが、すぐに涼しげな表情を戻す。

「ああ。これでみっちり、お前様とは【縁】で結ばれちゃいました」

何ともないような甘い声を響かせたまま、妖怪は最早選択の余地は無いと言う風に俺の腕を引っ張り上げた。

銀の蛇の合間からは、しゅうしゅうと肉が焼ける白い煙が上がっている。だが、やはりそれ特有の不快な臭いは無く、溶けるような芳香を帯びた煙だった。

妖怪は肩に掛かった襦袢をすりりと外し、真っ黒に汚れた俺に優しく被せた。滑らかな絹が俺を包み込んで、炎の熱も咆哮も遠くなくていった。

そして、その辺りから俺の記憶は急激に薄れ、酷く霞み掛かってしまふ。

安堵と共に気を失った俺が、次に覚醒した時には、既にこの幻場の里、帰れない場所の住人となっていたからだ。

だが恐らくあの時、極彩色の視界と甘い香りに包まれて、俺は多分、一頻り泣いていたんだと思う。

この時のことを思い出す度に、何やら無性に恥ずかしいのは、きっとその所為だ。

お陰で、あれから十年が過ぎ去った今となっても、御師匠とは、この邂逅について未だ一度も語り合ったことはない。

序ノ巻（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございました。

いかがでしたでしょうか？

少しでもお気に留めて頂けたのなら、嬉しいです。

いノ巻【へそが茶を沸かす（一）】（前書き）

どうもどうも、漸く本編の投稿と相成りました。

もともと面倒臭い文章なのと、世界観なんかの掌握も混じり合わさ
って、初っぱなから文字数半端ないことになってますね。あははは
…。

出来ることなら、長いけれども退屈しない、そんなお話を目指して
ます。まだまだ道のりは遙か彼方ですが。

少しでもお楽しみ頂けるものに仕上がっていれば、うれしいです。

いノ巻【へそが茶を沸かす（一）】

「こけこっこっつー！！！」

俺は布団の中で慌てて耳を抑えながら、最悪の目覚めを味わっていた。

冗談のような間抜けな発音で、しかし、耳をつんざくけたたましい鳴き声が響き渡る。

薄目を開らき、障子越しに外の明るさを確認すれば、丁度、太陽が峠の合間からそろそろ顔を上げるか、という時分であるようだ。だが、これは時を告げる雄鶏ではない。そもそもうちでは鶏など飼っていない。

鳴き声の主は屋根に刺さる^{ぶりき}鍼の鶏である。風見鶏という作り物の雄鶏だ。

いつだったか、酔っぱらった師匠が^{うつし}現世から持って帰ってきてしまった物である。

忘れてしまったが、何やら不思議な響きの名の国には、家の屋根によくこれが突き刺さっているのだそうだ。

本来は風向きを計る為の物らしいのだが、そんなものを計っても何の役にも立たない、鶏なのに鳴けないのは可哀想だと、師匠が勝手に仕様を作り変えてしまった。

屋根の上では、師匠より与えられたその新たな役割を遂行するべく、鶏は鉄板の体を未だくるくると回している。

葦葦きの粗末な天井を透けて、かたかたと地味に喧しい音が伝わっていた。俺の耳に知らせるだけならばこの音でも充分だろうと、眠い目と未だ耳鳴りする耳を塞ぎながら思う。どう考えてもあんなに大音量で鳴く必要が無い。

そう思う側から、痺れを切らした風見鶏は、再び雄叫びのような鳴き声を上げる。

「こけ、こけ、こけこっこっつー!!」

来客の知らせだった。

ここはものの怪達が住まう世界、「まほろば幻場の里」。

俺と師匠が暮らすこの小さな庵は、大抵は里の北端の林の中にあつたが、時たまに南の湖の畔にあつたり、どことも知れぬ断崖絶壁にあつたりもした。また、北の林が実は里の真ん中だったこともあつた。

それはこの庵に限った話ではなく、この世界では地形や方角の大半は気紛れ者で、時間と空間は怠け者だ。

つまり大抵の事象に関しては概ね、「何でもあり」ということである。

だから果たして土地が移動するのか、周りの景色が移動するのか、はたまた双方勝手気儘に移動し合うのか。

とにかくこの世界で俺は地図というものを見た試しがない。

それでも取り敢えず今朝は、いつも通り北の林の最中らしく、しんと冷えた霧の気配と、杉の頭を揺らす冴え冴えとした風に葉音が通っていた。

俺は寢床からのろのろと起き上がり、枕元に転がっているはずの仮面を手探りで探し当てる。

この世界で暮らすことになってから、毎日欠かすことなく被っている面である。

「俺はものの怪である」

俺は面を顔に当て、毎朝の儀礼と化した台詞を呟く。最初は恥ずかしかつたが、流石にもう慣れた。

これは勿論、俺の趣味で被っている訳ではない。そしてこの独り言も真つ赤な嘘である。

残念なことに俺は未だに真正正銘、健全なる人間だった。

しかし、この面を被り続ける限り、今、俺が呟いた嘘、「俺はものの怪である」ということに関しては、たとえ閻魔大王でさえも見破ることは出来ない。

と、作り主であるうちの師匠はよく豪語してくれる。無論、閻魔様の前ではまだ試したことはないが。

師匠より貸し与えられているこの面には、被り主の言う「嘘」を、最初に吐いた一つだけではあるが、真実だと見せかける力があるのだそうだ。

その名も「浮気名人」。全く、思わず身に付ける者の品性を疑いた

くなるような素晴らしい名前である。

うちの師匠が趣味と実益を兼ねてやっている妖具作りは、里で一二を争う程の腕前だった。どれも強力且つ、珍しい妖術を秘めた代物ばかりである。

しかし、「馨子さん」や「エングチヨ刀」など、名前の恥ずかしさにかけても、他のものの怪達の追隨を決して許さなかった。

それでも、この仮面のお陰で俺の正体が未だに里のものの怪達にばれていないのは確かである。こんなにも出鱈目だらけ、ものの怪だらけの世界で、俺のような何の力も無い人間が、未だ誰の胃袋の内も拝むことなく暮らしているのだから。

名前は兎も角、今の俺にとって無くてはならないものであるのも事実だった。

だが、もう一つ難点を挙げるならば、この妖怪面「浮気名人」、この里の地形より尚、気紛れであるということだ。

表情どころか、象る物の種類すら、被り直す間に、ころころ変わってしまうのである。

狐にひよっとこ、昨日おかめと思えば明日は般若はんじゃという具合だ。そうかと思えば何故か一月近くずっと翁おきなの面、なんていう時もあった。とにかく気紛れなのだ。

だから毎日被り続けているのに、未だ何処かしら違和感があつて、顔にはちつとも馴染まなかった。

因みに今朝はと手鏡を覗けば、真っ赤になって眉間を歪ませた敵めしい天狗の面である。長い鼻が邪魔臭くて敵わない。今日は何かと慎重に行動しなければならぬだろう。

そんなことを思う側から、案の定、長い鼻を二度ほど箆筭にぶつけた。俺は鼻を引っ掻けながらも、素早く身支度を済ませる。

「まあーし、お客様、申し訳ないが、今の暫く御待ちなさい」

居間に到達すると、俺は戸口前で待つ客人に一声呼び掛けた。こんな早朝から押しかける無礼者に気を使っているわけではない。放っておけば、まだまだ鳴く気満々の鶏を牽制する為である。我が家に来て耳を壊したものの怪は数知れない。

客間兼、居間の囲炉裏間は、客間としての誇りを放棄して既に久しく、師匠の集めたがらくたやら、俺の一般教養用の書物やらが所狭しと散乱していた。

この惨状を正すことなど、起きた端から諦めている。俺は囲炉裏端だけを軽く整えて、いそいそと来客が待つ戸口へ向かった。

「これはこれは、狸の旦那。朝早くから畏れ入ります」

戸口を開ければ、そこには良く肥えた中年男がふんぞり返って立っていた。

お辞儀をした拍子に長い鼻が、立派な腹にめり込んでしまう。狸の旦那はうぐぐと呻くも、直ぐに腹の弾力で押し返された。

「おい、煤ノ介、今朝はまた大層な面構えをしとるじゃないか」

申し訳御座いません、と俺は同じ攻撃を仕掛け、今度は鳩尾を狙う。だが、狸の旦那は体格に似合わぬ素早さで、鼻を握って俺の頭を止めた。

「未熟者めが」

狸の旦那は得意げに胸を張った。ぼよんと突きだしてくる腹に、天狗の鼻ではなくもつと鋭利な物を突き刺したいという衝動を堪えつつ、俺は握られた鼻を振りほどいた。

「生憎ですが、御師匠なら留守ですよ」

俺は顔を覆う面で表情が漏れぬことを幸いに、表の天狗と大して変わらない、満面の渋面を正すことなく来訪者に告げた。

でん、と偉そうに構える旦那は、そんなことは分かっているわい、と大層偉そうに更に胸を張り出した。

しかし、どうやったって、その姿勢から張り出てるのは腹ばかりである。

「うぬの師匠の甘ったるい臭いときたら、戸口の河原からだつてぶんぶん臭ってくるからなあ。あの放蕩者が此処におらんことなど、とうに承知しておるわ」

なら来るなよ、と心中吐き捨てながら、俺はやれやれと肩を落としたり男を屋内に招き入れた。

「左様ですか。まあ、良かったら御上がりください。手前も今しがた起きたばかりですので、大した持て成しは出来ませんが」

「それも承知しておる。ここで満足のいく持て成しなど、たとえ盆正月とて期待などせぬわ」

いつもながらの減らず口を叩きながら、狸の旦那は遠慮の欠片もなしにづかづかと居間に上がり込む。自分の家だとして畳の上はもう少し大人しく歩くものだ。

俺がなんとか先回りして囲炉裏の上座に座布団を用意していると、狸の旦那はふと足を止めた。

「なんだ、本当に今まで眠りこけていたのだな、この怠け者め」

襖の隙間から、床の間に散らかった俺の寝床を眺め、狸の旦那は大袈裟に嘆く。

「これだから近頃の若いものの怪は廃ってゆくんじゃないか。ったく、あいつときたら、甘ったるいのは身体だけで充分だろうに。こんなんだからいつまでもたっても弟子が育たんだ」

いや、ものの怪とは夜働くものである。平安の昔からそういう風に相場が決まっているのだと、俺に教えたのは確かこの狸だったはずだ。

大体、当の旦那だって、真っ昼間からうちの師匠と酒盛りをしてはべろんべろんになっているのが常套である。

いったい俺の寝起きと昨今のものの怪の衰退ぶりとにどんな因果関係があるかは知らないが、口答えを試みたが最後、明日の朝まではゆうに説教が続くことも充分承知していた。

なので、不満は全て軽率にも襖に隙間を残した己の指先に追いやつて、俺は襖を思い切りぴしゃりと閉めた。

「これはお見苦しいものを失礼致しました。うちの甘ったるい師匠

は旦那と違つて朝は弱い質なので、手前があんまり早起きしくとも、お世話に差し支えないんですよ」

言外に今何時だと思つてんだよ糞狸、と付け加え、俺は座るよう旦那を促した。

俺が勧めるまま、狸の旦那は囲炉裏端の座布団にどかりと腰を下ろす。先程火をくべたばかりの茶釜からはまだ湯気も立っていない。茶を一杯振る舞つて帰すにも、もう暫く時間が掛かりそうだった。

「ふん、あの師匠にしてこの弟子あり、と言つわけか」

狸の旦那は偉そうにふんぞり返つたままそう言つて、にやにやしなから己の腹を景気良く叩いた。上品な着物をはち切れんばかりにする立派な腹からは、ぽぽぽんと鼓の陽気な音が響く。

このやたら態度のでかいものの怪が御師匠から「狸の旦那」と呼ばれている由縁の一つである。

狸と謂えば腹鼓、^{はつぽう}ということなのだそうだ。

とは言ふものの、腹の皮が良い音を奏でるからといって、この妖怪の正体が狸だ、なんていう証拠には勿論ならない。

いや、恐らくこいつは狸なんかじゃないだろう。近頃は薄々俺も感付いてはいるのだが。

俺は、未だ寝惚けているような囲炉裏のやる気ない火を混ぜながら、対面のものゝ怪の顔をまじまじと眺めた。顔はすっぽり仮面で覆われているから、どんなに見詰めても睨み付けても、大して無礼な行いにはならない筈だ。

狸の旦那は、ぱつと見た目は、大店おおだなのご隠居的な装いで一步間違えば悪代官という趣の、高価そうな着物を着ていた。

丸々と肥えてはいるが、大男と呼ぶには上背が無く、それでいて真ん丸の頭に乗せた鬚まげは、何故か横綱のような立派な大銀杏である。

決して見目が良いとは言えない。寧ろ、どう見ても不細工で不恰好なでぶ妖怪であつた。

なのに、見目が良いだけを取り柄のうちの師匠と並び立つても、このものの怪は何か見劣りするところがない。それは、俺とつて長年の謎の一つである。

太く厳めしい立派な眉は持ち主の尊大な性格を良く表してはいるものの、くりくりとした円つぶらな瞳は、眉の効果を相殺して余りあるくらい間抜けに可愛らしかった。そしてその余つた可愛らしさを情け容赦なく吹き飛ばすのは、酒色の抜けない団子っ鼻と意地汚い大きな唇。艶やかでぴんと上向いた口髭は上品なのに何処か野暮つたい。

性格はすこぶる悪いが、まあそんなに悪人ではない、だがとても嫌な奴だ。という、否、もとより人ではないが、そんな旦那を見事良く表している面構えだった。

確かに狸の旦那とはまさしく、見れば見るほどに胡散臭く、見るからに狸めいてはいる。

だが、そんな単純明快なものの怪など、そうそうこの世に居ないということを、十年の妖怪暮らしで俺は嫌というほど学習していた。

それでも、この里では師匠にならつて皆が「狸の旦那」と彼を呼ぶ。真の正体は貉か狐か、はたまた河童かそれとも壺か茶釜か。

師匠ならば、実はその真実を知っていそうな感じもするのだが。

狸の旦那は最早狸の旦那以外の何者でもない、というのがまるで世の真理だというような扱いで、その師匠自身の正体と同様、未だ話題の端にも上げて貰えた例がない。

幻場の里とは大概はそういうない加減な理屈が平気でまかり通る場所であり、互いの成り立ちを深く詮索し合わないのは、ある意味ものの怪同士の礼儀でもあるようだった。

「で、旦那。今朝は御得意の早起きまでして頂いて、態々お越し頂きましたのはどういう用向きで御座いますしょう？手前のぐうたら振りを、今さら罵りにいらっしやっただんですか」

さつさと要件を伝えて疾つとと帰れと、明様な口調で表現する俺に、狸の旦那は再び愉快げに腹をばぽんと鳴らした。

「うぬも、よくまあ人の身で、お面の下の皮がそこまで厚くなつたものよのう。近頃はなかなか妖怪暮らしも様になつてきたではないか、ええ、煤ノ介？」

これが、この旦那がどんなに性格が悪かろうと、面倒臭かろうと、俺が無下に出来ない理由である。

狸の旦那は師匠を除いて唯一、俺が人間だということを知らるものの怪だった。

残念なことに浮気名人は潔い質なので、一度嘘が露見してしまった者には、二度と同じ嘘を吐いてはくれない。

「お陰様で何とか。ですが、ご覧の通りのお面を被って、まだまだ毎日腹が減る身で。師匠や旦那には申し訳なく思っております」

皮肉混じりにしたって、大層珍しい旦那からの誉め言葉に、俺も恐らく珍しいだろっ謙虚な態度で礼をして応じる。

狸の旦那はますます腹を賑やかして、からからと笑った。

「何、それは仕方あるまいて。まだうぬはここに来て百年かそこらだろう。我輩とて数百年はまともに空で息すら出来なんだ。うぬなどあと千年はおまんま食って育たにゃならんわい」

「まだ十年です」

ならばあと一万年だ、と嘯いて、旦那は大きな口をにやりと歪めた。

「兎に角、気長にやることだな。この里じゃ時間は酔っ払い親爺とおんなじさ。あっちへこっちへ、ふらりふらりとよるめくが、前이야そうそう進みやせん」

旦那は落ちを着けるようにぼん、と腹を叩いた。

そしてすぐにころりと態度を反して、それにしてもまだ茶の一杯も出ないのか、とやおら怒り出す。

俺に気長を勧めたとは思えない短気っぷりに苦笑しつつも、俺は茶釜の蓋をずらし、未だ波打たぬ湯面を覗いた。

「まだ湯が沸きませんもので」

「阿呆。湯なんぞどこでも構わんわ」

茶を構成する大半は熱湯だと俺は思っただが、狸の旦那はいらいらとそう言い放って、懷から金きらとした湯呑みを二つ取り出した。

そして、ほれ、と俺に一つを浮かせ渡す。湯呑みはふわふわと囲炉裏を横切り、俺の掌に収まった。

「熱っ!？」

軽く受け取ったはいいが、その熱さに思わず落としそうになる。しかし高価そうな金色の湯呑みは、俺の貧乏根性を目覚めさせ、なんとか囲炉裏に放り投げずに握り止めた。

「何をやっとする。茶なんだから熱くて当然だろう」

見ると金の湯呑みには、よく色の出た茶が波々と湯気立っていた。茶柱まで立っている。

「なんですかこれは」

俺は茫然と、当たり前のことを取り敢えず聞いてみた。

「だから、茶だ。茶だろう。うぬは茶を知らんのか。この茶が茶に見えんなら茶以外の何だというのだ。茶は茶としか言い様がないわい」

何やら早口言葉のように茶を連呼しながら、狸の旦那はその茶を啜った。

これ以上は何も問わず、旦那に倣ってこの湯呑みを煽るのが、ものの怪としての行動だとは知りつつも、やはりどうあっても納得がない。

「ですから、なんで旦那の懷から熱々の茶が出てくるんですか。狸の旦那は腹で茶を沸かしたんですか」

俺が面の下から睨み付け、この不可解な現象を糾す。

狸の旦那は重々しい真剣な顔を作り、おもむろに頷いた。

「然り。まだまだうぬは人の子よのう。そんなことも知らんのか。臍へそが茶を沸かす、と巷ではよく言うものぞ」

旦那の言う巷というのが、何処から何処までの範囲かは知らないが、少なくとも俺の臍にはそんな力はない。

師匠のにだって無い筈だ。あつたら住まいにこんな囲炉裏は必要ない。その前に師匠の腹に、果たして臍なんていう余計な物が付いていただろうか。

狸の旦那は湯呑みを片手ににやりと怪しく笑う。俺は俄にぞくりと背中が寒くなった。

「立派な腹とは思っていましたが、まさか。先程はよくぞ手前の面に情けをかけてくださいました」

一瞬で茶を沸かす腹に顔を突っ込んだ、怖いもの知らずの過去の己を諷めながら、俺は丁寧に頭を下げた。

例え一見ただのぶ親爺にしか見えなくとも、やはり眼前の妖怪は、御匠と縁を結ぶ者だ。ただ者ではない。

「ぶほっ」

だが、狸の旦那はそんな俺の有り様を見るなり、茶を吹き出して酷く噎せた。

苦しそうに腹を抱えて笑っている。

「ぐひひひ、すまん、ちょいとからかいが過ぎたわい。安心せい。我輩の臍とて未だ茶は沸かせんわ。うぬが育つ筈だった世界じゃ、有り得んほど滑稽で馬鹿らしい、なんかを喻え言葉にしてそう言うのだよ」

数秒、沈黙が流れた。

「ごんの狸爺……」

俺は、その狸爺に、すっかり遊ばれていたことを理解する。

今日の浮気名人は、なんだかよく顔に馴染んでいるような気がした。

「うおっい、熱ちいつ。すまん、すまんかったって」

俺の手に握られた湯呑みの中身が旦那の鬚をしどしどに濡らす頃、漸く囲炉裏にはぱちぱちと赤い火が膨らみ、茶釜からは温かい湯気が昇り始めてきたのだった。

いノ巻【へそが茶を沸かす（一）】（後書き）

ご一読ありがとうございます。お疲れ様でした。

それにしてもこれだけ書いて、まだ当の御師匠すら登場させていないという……。

もしも、お心の端っこにでも留めて頂けましたのなら、この通りのたのたと進んで参りますので、どうぞ今後ともよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3601n/>

『ものの怪の弟子』

2010年10月9日19時23分発行